解説

バルザックが、実業に失敗して借金にまみれ、背水の陣で小説家としてスタートしたのは一八二九年、三十歳の時であった。以後、矢継ぎ早に作品を発表するようになるが、それはまさに「自転車操業」の結果であった。まだ海の物とも山の物とも分からない構想段階で約束し、金を受け取る。彼は借金取りにも追われたが、約束の作品の完成にも追われ続けた。しかも、しばしば何本も同時並行で、無責任に思えるほどである。しかし、出版人からは無責任に見えたかもしれないが、バルザックは無責任ではなかった。粗製乱造を全くしていない。よく知られているように、彼ほど、出版人からは腹立たしくてならなかった度重なる校正に校正を重ねた作家もいないのである。

バルザックは、一八三四年、金に窮しながら次々に新しい物語を作り出してゆく中で、ふと、すべての物語を繋いで巨大な小説宇宙を作るというのはどうか、と思い付く。天才は、それを具体的に構想し始めた瞬間、自ら、俺は間違いなく天才だ、と思ったらしい。妹の家に駆け込んで、「俺は天才になった！」と叫んでいる。そのことが、妹ローヌの手記に記されている。かくして、「人物再登場」という手法が生まれ、『ゴリオ爺さん』から実際に適用された。以来、バルザックは、それまでの作品をそれ以後の作品に巧みに繋いでゆく。また逆に、再版の際に加筆修正を加えて、以後の作品に以前の作品を改変しながら繋いでゆく。

『柘榴屋敷』は、彼がまだ「天才」になる前の作品である。しかし、「天才」になってから、この小説

はまず『ゴリオ爺さん』に、次に『谷間の百合』に、最後に『二人の若妻の手記』に関連付けられた。その結果、すばらしい奥行と響きとを持つ作品になった。そのことは先に発表した拙稿にあるから、興味のある方は是非ご一読いただきたい。

だが、『柘榴屋敷』は、たとえそうした他の作品との有機性を読者が知らなくとも、一個の独立した小品として十分に楽しむことができる。私は、初期の、小粒の、最も透明度の高いダイヤモンドだと思っている。

初期の作品は、どれも、彼の基本的な小説形式である長い描写から始まる。まず舞台となる土地を描き、建物を描き、内部の構造や調度を描き、ようやく人物が出てきたかと思うと、今度はその人物の外貌を描き始める。実に悠然と順序正しく進んでゆき、現代のたいがいの読者は、最初の数頁を忍耐するともう嫌になる。

しかし、テレビもラジオも、一般には、書物も、自宅で読める新聞すらもない（本も新聞も高価なため、庶民は今の漫画喫茶みたいなところに読みに行った）、きわめて情報の僅かだった時代、「嫌になる」この描写は、現代よりはるかに、狭い領域で生きる人々の知識欲に応え、また未知の世界に憧れる人々の想像力を刺激して、彼らが滅多に味わうことのできない精神の愉悦と充足感を与えたはずである。

だから我慢しろ、と言うつもりはない。ただ、文学の読書の深さは、知への欲求と、ここにないものへの憧れと、それを源にする想像力にかかっていることは、今も昔も変りはない。そして、高貴な精神的愉悦は深い読書でしか得られないものである。

ともあれ、このわれわれを辟易させる最初の長い描写、その中で、バルザックは、単に物語の箱となる

外面的な状況を説明しているのではない。実は、ドラマに必要なリアリティや、たとえて言えば弦楽器が高らかに鳴るための共鳴箱のようなものを、予め描写をとおしてがっちり作っておこうとしているのである。だから、この準備が万端だと、物語が動き始めるや、鮮明なイメージを持って筋は疾走するように展開し、みるみる結末へと至る。最後の数頁に、見事なまでに感動が凝縮されている。いわば、そこに来ると、われわれの脳のシナプスが、不意に、一挙に、光の放出を始めるような具合なのである。これは長い描写に忍耐した読者だけが本当に深く味わえる心の御馳走だと思う。

『柘榴屋敷』は夏から物語が始まっている。ロワール河の谷間の夏がいかに美しいか、読者は、風景や植物の長い描写をとおして、あるいは叙述をとおして、イメージをしっかり頭に刻み込む。そして、物語は冬に終わる。しかし、夫人が子供たちと最後に戸外で過ごしたのは晩秋の午後だった。柔らかな日差し、木々の紅葉、空に浮かぶ白い雲、その光景は「一枚の崇高な絵」だった。最初に美しい夏のイメージを頭に刻み込んだ者は、おのずと、秋が、夏をはるかに凌駕して美しいことを理解し、想像する。物語と共にめぐるこの四季の変化を感じ取るとき、物語は深い詩情を帯びる。物語を包む空間の壮麗な美しさが、感動の透明度をひときわ高めるのである。

バルザックは、数々の重厚長大な小説で有名であるから、一般には、彼の短篇と聞くと、比較的価値の少ないもののように思われがちである。しかし、短篇には、しばしば、長篇ではその膨大さ広大さのゆえに感じ取ることが難しい、彼の詩人の一面が色濃く現れており、『柘榴屋敷』はそうした名品の一つなのである。私は、翻訳しながら、いくども目頭を熱くした。思わず落涙もした。それは、この短篇の文体や感動の性格が簡素で、ストレートで、詩情に富み、それだけに訴えかける力が強いからである。また、物

語を包む自然のイメージが単一できわめて美しいからである。長篇の複雑に入り組んだ関係から湧き上がる重く深い感動とはまた別の、素直で、純で、そして何より優しい感動が、このバルザックの小品にはある。『柘榴屋敷』はすばらしい読後感の得られる小説である。人間の持つ善意を素直に感じ取ることのできる小説である。この短編がもたらす愉悦を、より多くの人と、共に享受できれば幸甚である。

佐野栄一